【様式１】　　令和４年度　学校評価　学校関係者評価書

小野市立小野中学校（園）

１　学校教育目標

～自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断できる、心豊かな生徒の育成～

２　今年度の学校重点目標

〇生徒の自尊感情を高める指導の充実。
〇特別な支援を要する生徒の理解深化と支援の充実。
〇新学習指導要領の円滑な実施。
〇ＧＩＧＡスクール構想の実現。
〇小中一貫教育のさらなる深化。

４　総合的な学校関係者評価

〇　評価の中に具体的な数値が明記されているので、この１年間の取り組みの成果がわかりやすくなっている。
〇　新型コロナの影響もあり、全国的に不登校生が増えているが、ピアサポート等子どもたちのつながりを意図的に仕組んでいく取り組みは重要だと思う。
〇　福祉や子育て支援課等の関係機関やＳＣ,SSW との連携により、支援を要する家庭や配慮を要する生徒への対応が適切に行われている。
〇　若手教員、ミドルリーダーの育成が、これからの学校における最重要課題ではないでしょうか。
〇　小中一貫教育の取り組みである１日生活体験や交流活動が制限されてしまったことが、新入生に影響していると思われる。

３　学校自己評価結果（Ａ大変良い・Ｂ良い・Ｃあまり良くない・Ｄ要改善）

分　　野	評価項目	達成状況	成果・改善策
特色ある学校運営	①　「学び合い」による授業改革 ②　掃除の時間を道徳教育として位置づけ、自分と向き合い自らの「心」を磨く。 ③　モジュール学習で意欲、集中力、記憶力を高める。 ④　ＧＩＧＡスクール構想の実現	Ｂ	適切なコロナ対策を講じながら通常の教育活動を取り戻し、予定通りの取り組みによって成果が出たためＢ評価。 ①　４人班での学び合いを再開し、互いの思いに共感する体験を積むことができ、相互授業参観で研鑽を積んだ。 ②　感染対策には十分注意しながら膝つき雑巾がけを行い、生徒にとって自分と向き合う充実した時間となっている。 ③　朝モジュールを効果的と感じている生徒の割合が 9.9 ポイント上昇しているが、新たな教材の開発を含め再検討の必要がある。 ④　リモート集会で効果的に活用できており、授業における話し合いの場面でも、ジャムボード等効果的に活用できるようになってきた。 【課題】 ・　脳科学理論における読書の大切さをＰＲし、図書部との連携により読書好きな生徒を増やしていく。 ・　教科モジュールにおけるマンネリ化を防ぐために、教科間での情報共有を図り、内容を工夫改善する。 ・　「自問」のステップアップ。我慢する心→人の気持ちを汲む心。 ・　脳科学理論を推進するためのツールとしての活用方法の検討。
確かな学力の育成 （おの検定）	①　基礎、基本学習の定着 おの検定合格率７０％ ②　自学自習の週間の定着	Ｃ	通級やＳＡの支援等で底上げを図っているが、不十分であるためＣ評価。 ①　教科モジュールで、おの検定の練習問題を活用しながら基礎学力の定着を図っているが、漢 55.0%(＋6.1)計算 68.5%(＋8.5)英 35.6%(＋2.3)と３教科とも合格率が昨年比でアップした。 ②　学習部の取り組みである、学習計画を考える時間の設定により、テストに対する意識の向上、計画的な学習の実践につなげることができ、学習時間の増加や課題提出率がほぼ 100%に達した。 【課題】 ・　課題の意味ややり方が分からない生徒も多数いるため、適切な指示やサポートが必要である。

小中一貫教育	①　自主的な家庭学習、授業での学び合い推進 ②　生活指導面での綿密な情報共有と同一歩調での取り組み ③　交流行事の取り組み ④　各教科での交流	B	コロナ禍ではあるが、感染予防対策を徹底しての学び合いを再開し、一定の成果を得ることができたためＢ評価。 ①　自主学習ノートの活用を促進することで、家庭学習の意識が高まった。また、司会の進め方等を小中で統一したことでスムーズに話しあいが進められるようになった。 ②　定期的に生活指導（いじめ）対策委員会を合同で実施し、共有した情報を指導に役立てることができた。 ③　小中挨拶運動や合同のアルミ缶収集を行うことができ、社会福祉協議会に高齢者用玩具を寄付することができた。小中交流参観を再開することができ、お互いの良い面を再確認することができた。 【課題】 ・　個人によって、家庭学習の取り組み内容や時間に差があり、支援が必要な生徒も多いため、家庭学習の手引きを改定していく必要性がある。 ・　ＳＮＳの使用に関する家庭内ルールが守られておらず、小野中４箇条についても再啓発が必要である。
人権教育・道徳教育	①　命について考え、自他を大切にする人の育成を目指して ②　人権教育の推進	B	授業や行事を通して生徒の人権意識の高まりを感じることができたためＢ評価。 ①　命についての教材を年間３回以上実施し、ローテーション授業により十八番の教材づくりや共同での教材研究ができた。 ②　人権旬間や人権弁論大会を開催することで、仲間に対する思いやりや連帯感を育むことができた。 【課題】 ・　普段の学校生活の中では、まだまだ人権意識に欠ける言動があることが残念である。人権旬間で学んだことを、日常生活の中でどのように行動に結びつけていくか。 ・　自問に意欲的に取り組む生徒とそうでない生徒の個人差。
生徒指導	①　開発的･予防的生徒指導の実践 ②　不登校生との関係を「切らない、維持する、育む」の実践	C	生徒指導、不登校共に課題が多いためＣ評価。 ①　学校改革を教職員が意識し、子どもたち一人ひとりの個性を理解し、愛情と熱意を持って子どもたちに寄り添い、教員のセルフチェックシートを活用しながら不適切な指導の根絶に取り組んだ。 ③　ＳＣ・ＳＳＷ、適応教室と連携しながら、個に応じた対応（朝の登校、にこにこ教室、放課後登校等）に取り組み、教室復帰できた生徒も見られた。 【課題】 ・　様々な個性を持つ生徒が多数在籍しており、個に応じたよりきめ細かな指導の必要性が感じられる。 ・　不登校の増加が大きな教育課題となっている。
学習指導	①　４人グループでの主体的学び合いの推進 相互授業参観カードの活用 ②　計画的な学習習慣の確立 ③　ＡＳＫ学習の深化	B	取り組みの成果が形となって表れつつあるためＢ評価。 ①　コロナ禍ではあるが、感染予防対策を工夫して学び合いの場面を仕組むことで、生徒の中に全員で学びを深めようという姿勢が見え始めた。 ②　学校全体で学習計画を考える時間を設定することで、テストに対する意識の向上、計画的な学習の実践につなげることができた。 ③　生徒会学習部による啓発活動により、「押し出し発言」「接続語発言」「ロング発言」「理由づけ発言」に対する意識が向上し、学年が上がるほど、授業の中で実践する生徒が増えた。

	④　新学習指導要領完全実施に伴う正しい評価のあり方についての研究		④　新たな 3 観点を正しく評価するための評価規準や評価材料の整理を行い、学期ごとに評価内容について検証を重ねた。 【課題】 ・　対面でのスピーチを制限するためにクロームブックのジャムボードを活用しているが、対話の重要性を再認識する必要がある。 ・　主体性や思考力といった数値化しにくいことを評価する際には、とくに「妥当性と信頼性」が必要とされるため、時間軸で子どもを観察し、子どもたちを多面的に見ていく必要がある。
特別活動	①　集い・憩い・潤い・安らぐ時と場が保障される学級づくり ②　生徒会活動や行事を通して、社会性を身につける	B	全体として良好な結果を維持できているためＢ評価。 ①　年２回実施している学級集団形成テストでは、「なかよし」「いばらない」や「いたわり」の数値が高く、お互いの意見を尊重し合いながら学校生活を送れていることがわかる。 ②　特別活動についてのアンケートでは、概ね良好な結果を維持し、当番活動や自己の役割を果たす意識が高まっている。また、互いの意見を尊重し合いながら学校生活を送ることができている。 【課題】 ・　発表や積極性の項目がやや低いため、行事や専門部活動を通して、成功体験を積ませ、自信を持たせたい。 ・　「課題解決」の項目で数値が低いため、リーダーを育成するための教師の支援が必要である。
特別支援教育	①　特別な支援を要する生徒の理解深化と支援の充実 ②　小･中･高の連携 ③　保護者、関係機関との連携	B	学校改革とも連動した取り組みにより、教師の意識改革が進みつつあるためＢ評価。 ①　主に通級指導において個に応じた支援を行うとともに、定期テストでのルビうち、解答用紙拡大、マス目付き解答用紙など合理的配慮を積極的に推進した。 ②　小中一貫の特別支援教育部会を開催し情報交換を行った。また、９年生で高校への引き継ぎが必要な生徒のピックアップをし、引き継ぎ資料を作成した。 ③　小学校保護者向け特別支援学級・通級懇談会を開催　（１０月上旬　１回　両小学校対象に実施）し、好評を得た。さらに、保護者に個別進学相談会への参加を勧め、保護者と発達支援室とつながりを構築した。 【課題】 ・　授業のユニバーサルデザイン化をめざし、すべての生徒にとってわかりやすい授業にするための効果的な視覚支援、的確な指示の出し方等の研修が必要である。 ・　通常学級に在籍している生徒でも、個別の支援計画の作成が必要な生徒が多数いるが、担任にそこまでのゆとりがないのが現状である。
安全指導	①　安全教育の推進 ②　防災教育の充実 ③　保健指導の充実	B	教職員や保護者による日々の地道な取り組みにより、危機管理意識が子どもたちの中に浸透しつつあるためＢ評価。 ①　交通安全教室や教職員による登下校指導を計画的に実施し、生徒の安全意識向上に努め、大きな事故等はなかった。 ②　予告無しの避難訓練を２回実施し、生徒の防災意識向上や災害時の正しい行動について確認することができた。 ③　新型コロナウイルス感染予防に継続して取り組み、生徒会保健部による「手指消毒、三密回避の徹底」の呼びかけや教員の消毒作業により第８波でも大きな感染拡大にならなかった。 【課題】

			・　一部の特性を持つ規範意識の低い生徒に対する粘り強い指導が必要。 ・　新型コロナ５類移行により、子どもたちがマスクのない生活を取り戻すには大きなハードルが予測される。
進路指導	①　学年に応じた進路指導 ②　キャリア教育の充実	A	おおむね計画通りに充実した活動をすることができたためＡ評価。 ①　７年生のキャリア学習で夢を想像し、今の自分を見つめ直し、トライやるや自分の将来について少しずつ考えられるようになっている。 ②　９年生は進路指導を通して自分の今の状況を理解し、進路実現に向け行動にうつすことができるようになった。 ③　キャリア教育に関する校内授業研究会を実施し、教師の授業力向上に努めた。 ④　８年生はトライやるやキャリア講演会を通して、地域の経営者の生の声を聞かせていただき、自分の将来について考えるきっかけとなった。 【課題】 ・　キャリアノートをさらに有効活用し、９年間を見通したキャリア教育、進路指導を充実させる必要がある。
家庭・地域との連携	①　学校からの積極的な情報発信 ②　学校公開の実施 ③　地域行事への積極的参加	B	コロナ禍の影響で、学校行事への保護者や地域の方々の来校を制限せざるを得なかったためＢ評価。 ①　ホームページをこまめに更新し、学校行事や学校生活の様子を写真と共に掲載し、少しでも学校の様子がわかるように努めた。さらにメール配信システムを活用し、リアルタイムでの情報発信に努めた。 ②　コロナ禍の影響を受けたが、保護者の参加を制限しながらすべての行事を予定通り実施し公開した。 ③　吹奏楽部は積極的に地域行事に参加し、日頃の成果を発表した。さらに、小中が連携してアルミ缶収集を行い、収益で購入高齢者用玩具を小野市社会福祉協議会に寄付することができた。 【課題】 ・　コロナ禍の中での学校公開のあり方（クロームブックの活用等）を構築していく必要がある。 ・　保護者だけではなく、地域への積極的な情報発信が課題である。